

魔法のダイアリー プロジェクト 活動報告書

報告者氏名: 加藤佳乃

所属: 神奈川県立瀬谷養護学校

記録日: 平成31年2月19日

キーワード: コミュニケーション、動画・写真、表現、自己選択、日記

【対象児の情報】

・学年 小学部3年

・障害名 精神発達遅滞、難聴

・障害と困難の内容

- ・両耳とも難聴で、左耳に人工内耳を装用している。
- ・入学当初、本児が理解しているマカトンサインは日本版マカトン法語彙リストのステージ1、2と少なく、自分の思いが十分に伝えられず、物投げや髪引きなどの行動をとることもあった。そのため、写真カードや絵カード、手話やサインを使っでのコミュニケーションを指導した。中でも、手話やサインの習得が早く、教えた手話やサインで少しずつ自分の要求や拒否を伝えることができるようになり、落ち着いて学校生活が送れるようになった。(指の動きも模倣もとても上手であったため、保護者と相談し1年生後期あたりから手話へ移行している。)
- ・簡単な手話でのやりとりを積み重ねたことで、自分の思いを伝える手段として手話が有効であることを理解しており、本児からの発信も手話が多い。手話を通じない相手とのやりとりは主に写真カードや絵カードを使っているが、物が無い時には諦める様子が見られ、手話を理解している特定の人に伝えてくることが多い。手話でのやりとりが難しい相手には、手話のできる教員が間に入りながら、その教員に手話や指文字を模倣してもらって本児と間接的なやりとりをしているが、時間や場面が限られるため手話を通じない相手とのやりとりの回数を多くもてていない。本児は人懐こく、より多くの人と関わりたい思いがあるが、手話でのコミュニケーションが中心であるため、手話を通じない相手とは関わりをもちたくてももてず、結果として特定の人とのやりとりに偏っている現状がある。
- ・現在の状況と将来のことを考えると、特定の人とのやりとりではなく、いろいろな人に自分の思いを伝えたり、相手からの発信を受けて応えたりするなどのやりとりの経験が必要であると考え。また、本児は吸収が早く、教えれば教えた分、手話を覚え、伝えようとする気持ちが強い。本児が一番気持ちを伝えられるツールは手話であると日々の様子から推測されるため、手話でのコミュニケーションに重きを置いて指導している。しかし、この先、本児が生活していく環境に、手話でやりとりできる相手が必ずいるとは限らない。将来、場面や状況、相手に合わせて手話とiPadなど、どの手段が自分の思いをより伝えられるかその都度選択できるようになってほしいと考えている。同時に将来、生活する環境や関わっていく人(ろう者を含む)を考えると手話を必要とする場面もあると考えられるため、今後も手話を使い続けられるように手話でのやりとりを継続していきたい。

【活動目的】

・当初のねらい

簡単なサインや手話を使って、家庭や学校などで、教員や友達、家族に自分の意思を伝えることができる

・実施期間 平成30年5月～

・実施者 古謝 美沙紀

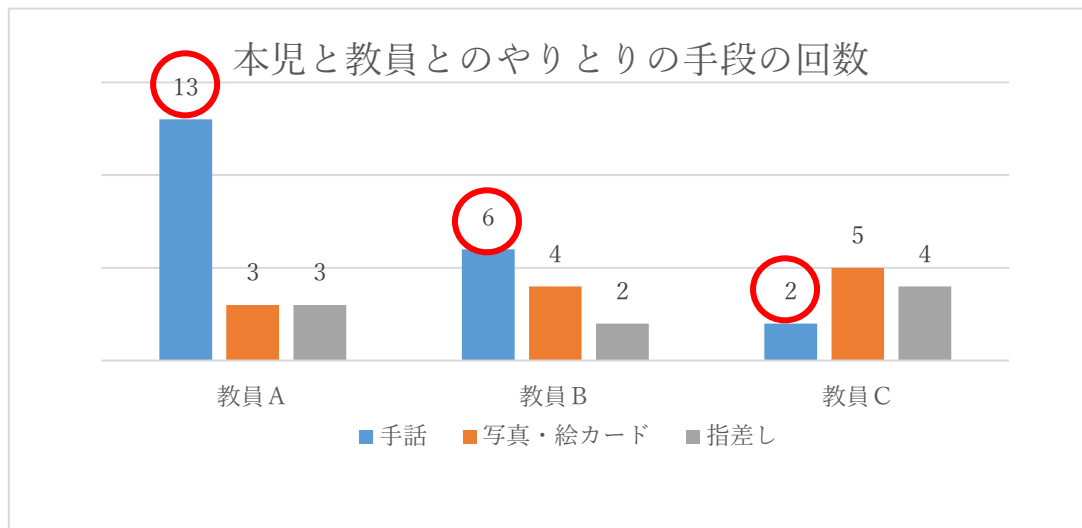
・実施者と対象児の関係 担任

【活動内容と対象児の変化】

・対象児の事前の状況

<コミュニケーション面：対教員>

- ・人懐っこく、初対面の人でも手話であいさつすることがある。また、学年外の教員や来校者などを「だれ？」と問うように指して聞いてきたり、指した後に「名前」の手話で担任に誰なのかと聞いてきたりすることが増えてきている。
- ・コミュニケーション手段として手話単語を中心に使用することだけでなく、必要に応じて写真や絵カードを使用して伝えることもできる。
- ・日常生活や学校生活で使用する言葉については、手話単語で理解しており、微細で複雑でないものであれば模倣が可能である。理解している手話単語を3～4語使って自分の意思や友達の様子を伝えることができるが、特定の人とのやりとりに偏っていると感じられた。そのため、本児が担任に発信してくるツールを手話、写真・絵カード、指差しに分類し、記録をつけた。下図は5月の本児と担任とのやりとりのグラフである。この図からも手話でのやりとりが教員Aに偏っていることが読み取れる。



<コミュニケーション面：対友達>

- ・現在のクラスの友達が昨年度とほぼ変わらなかったため、友達の名前を指文字で覚えていて、欠席の友達や泣いている友達がいたら「〇〇（名前）おやすみ」「〇〇（名前）泣く」などと教員に手話で伝えてくることがある。
- ・休み時間等に友達同士で肩をたたいて呼びかけたり、遊びに誘ったりする姿が見られる。クラスにはサインを理解して使う友達もいるが、おおまかなサインを使うため、子ども同士では十分に伝えあうこと難しく、教員が間に入ってやりとりしている。「たいこばし 〇〇（名前）」などと誘いたい友達の名前を教員に伝える姿が見られたが、友達に直接伝えるのではなく、教員に向かって伝えることが多く、教員が友達に伝えるように話しても教員の方を向いて手話をするのがほとんどである。

<文字への興味関心>

- ・ひらがなの習得はしておらず、文字への興味はロッカーの自分や友達の名札をなぞったり、教員が着用しているネームプレートの文字を指したりすることである。
- ・いくつかの名前カードの中から本児の名前を手話と言葉で聞くと自分の名前カードを取ることができる。

・活動の具体的内容と事後の児童の変化

取り組んだ内容は大きく以下の3つである。

- 1 家庭と学校とのサインの共有ができるようにサイン帳を使用。
- 2 学校や家庭での様子が振り返られるように写真日記を使用。
- 3 iPad を写真日記の代替として使用。

1 家庭と学校とのサインの共有ができるようにサイン帳を使用

○取り組み

写真、手話のイラスト、文字をセットにして、同じページに載せ、項目ごとに分類した冊子を教員が作成した。写真を指しながら、教員が行う手話を模倣させ、使用できる手話を増やせるようにした。サイン帳には日常生活で覚えたものだけではなく、個別課題学習での教材（絵本、色や動物などの名称など）から本児が学習したものを追加し、家庭にも持ち帰って確認できるように活用した。



○事後の変化

週3回の個別課題学習で使用するが多かったが、本児が冊子を開いて見ようとすることは少なく、教員が開いて見る機会を設定した。教員がイラストを指して「何？」と手話と言葉で聞くと、「ワニ」「くま」「オレンジ」などと答えることはできたが、自分から見たり、辞書のように活用したりすることは難しかった。しかし、サイン帳で確認したものについては、本児が理解しており、動物のパズルで遊んだ時に「ワニ」「とり」「きりん」などを手話で伝えてくる姿が見られた。

2 学校や家庭での様子が振り返られるように写真日記を使用

○取り組み

本児の生活を写真で振り返ることができるように学校や家庭で撮影したものを手話付きのイラストと文字と一緒にまとめた冊子を教員や保護者が作成した。学校では1年生の後期から、家庭では2年生から写真日記を作成している。特に家庭では外出時の様子を撮っていただき、学校では本児が写ること、また、より手話を活用している場面を意識して撮影した。



個別課題学習を中心に見る時間を設け、写真を見ながら教員の手話を模倣

したり、本児や友達の名前を指文字でやりとりしたりした。特にやりとりでは、「なにしてるの?」「だれ?」等と繰り返し問いかけるようにし、手話や指文字が定着することを意識した。

○事後の変化

2年生になり自分から写真日記を見るようになった。

学校で撮影した写真は教員が写真を指しながら、手話を繰り返し伝えたことで、自分でページを開いて「どろあそび」「ログハウス」などの手話をして伝えてくるようになった。実際の授業でも手話と言葉で伝えており、本児がすぐに模倣し、覚えて使うことができ、その中でも本児の好きな活動は、休み時間に自分から教員に手話で確認する姿も見られる。



家庭で撮影した写真は教員が冊子を広げたり、写真を指したりすると「カレーライス」「クリスマス」などと覚えた手話で伝える姿が見られた。楽しかった経験について、週明けの月曜日に教員に伝えてくることもあった。

具体的なエピソードの1つに「さかな おうち」と手話で伝えてきたが、教員が分からずに「何？」と手話と言葉で返すと、写真日記を持ってきて水族館に行った写真のページを開いて伝えるということもあった。



手話だけでは伝わらない時に、写真日記に伝えたいことが載っていることに気づき、相手に見せることで自分の伝えたいことが伝わるのではないかと考え、活用したのではないかと推測する。また、本児が見たいときに開いて見ている様子からアルバムとしても使っているのではないかと考えられる。

3 iPad を写真日記の代替として使用

○取り組み

家庭で母親の iPhone の写真（本児が写っているものや遊んでいる様子など）を見て、アルバムのように使っているという様子を聞いた。写真日記を学校では、アルバムとして、また、手話だけでは伝わらない時の補助的なものとして使っている姿が見られることから、iPad のプリインストールも写真日記のような使い方ができるのではないかと考え、使用した。学校や家庭での様子を教員が動画や写真に撮り、その日のうちに振り返りができるようにした。休み時間に撮った動画は直後に、体育や音楽などの授業で撮った動画や写真は休み時間や個別課題学習の時間で見返すようにした。

○事後の変化

動画の探し方を見せたり、教員が指した再生マークをタッチさせたりして操作する経験を積み重ねたことで自分で動画を選び、再生して見るようになった。また、一緒に見ることを誘うように本児は iPad を指しながら声出して教員を呼ぶ姿もあった。



iPad を向けると写真や動画を撮ってほしいと「カメラ」の手話で伝えてくることも増え、その後、教員の撮った写真や動画を満足そうに見て「三輪車」「おべんとうバス」「ねる くるま（キャンピングカー）」など遊びや活動の内容を手話で伝えてくる姿が多々見られた。さらには、「〇〇（本児）やりたい」と自分で撮りたいことを手話で伝えてくるようになり、一度撮る操作を教えるとすぐに覚え、先生や物などの自分の撮りたいものを撮ったり、インカメで自分を撮ったりするようになった。



本児が撮ったものの一部



撮ったものについては直後に見返して楽しむ姿があった。教員が「何撮ったの？」と写真を覗き込みながら聞くと、「〇〇せんせい」や「〇〇（友達の名前）」、お気に入りの個別課題学習の教材を答えたりすることもできた。また、撮って楽しむだけでなく、手話だけでは相手に伝わらない時に iPad の写真を自分で探して伝えてくることがあった。具体的なエピソードとしては図工の授業で行ったメダル作りを休み時間にやりたい時に自分の作ったサインで伝えてきたことがあり、教員が分からず、繰り返し「なに？」と聞くと、iPad の動画を探して、「これ」と運動会のメダル授与の動画を指して伝える姿があった。メダルを作りたい気

持ちや分かってほしいという強い気持ちがあったのと同時に、iPad の動画があることを思い出したことで iPad を伝える手段として活用したと考える。このことから、本児の中で iPad を写真日記の代替として位置づいたのではないかな。



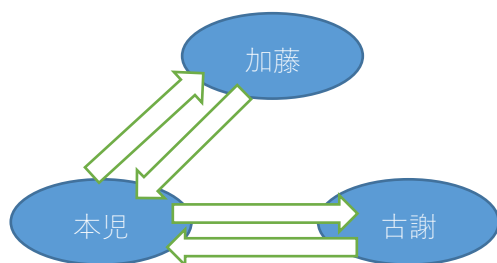
【報告者の気づきとエビデンス】

・主観的気づき

○本児と教員とのやりとりの手段に手話が加わり、使用する割合が増えた。

・エビデンス

5 月当初、本児は、より自分と関わってきた相手（母や元担任）に何事も伝える姿があり、他の人には手話よりも絵カードや指差しで伝えることが多かった。そのため、関わりの浅い相手にも手話で伝える場面を意図的に設定したり、写真日記等を活用したりして手話で伝わる経験を積み重ねたことで、「この人にも手話で伝わる！」と実感できたことが手話でのやりとりにつながったのではないかと考える。



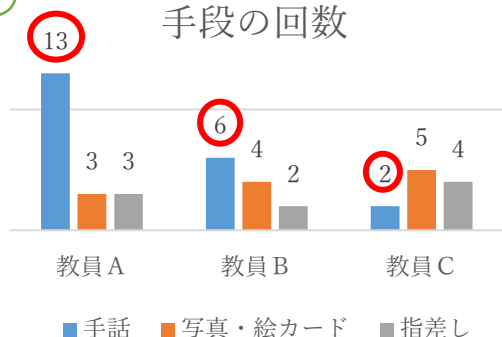
【やりとりの例】

- ①(本児)：加藤先生 下校ボード ちょうだい
- ②(加藤)：分かった 古謝先生にお話ししてね
- ③(本児)：先生 下校ボード ちょうだい
- ④(古謝)：いいよ どうぞ

また、同時に本児と教員 B、C もはじめは表情や動きを真似し合うなど直接やりとりすることを意識した。本児はそのやりとり遊びをととても楽しんでおり、自分からやりとり遊びに誘う姿も見られるようになった。やりとりの中で、少しずつ手話で話かけることを繰り返すことで、本児から手話で伝えてくることが増えてきた。このことから、教員 B、C が本児にとって楽しいやりとりができる相手、さらには手話でやりとりできる相手になったのではないかと考えられる。11 月のグラフから、手話でのやりとりの回数が 5 月よりも増えていることが分かる。

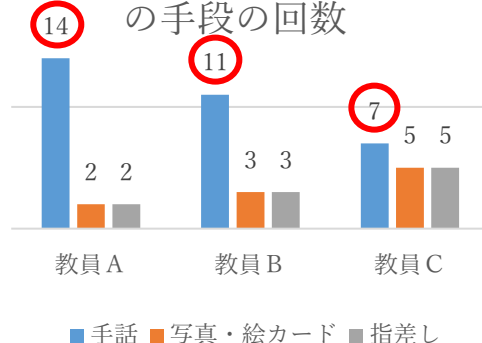
5 月

本児と教員とのやりとりの
手段の回数



11 月

本児と教員とのやりとりの
手段の回数



手話でのやりとりを積み重ねるだけでなく、その中で理解できる語彙が増えていることで自分の理解している手話を組み合わせて伝えてくる様子も見られる。最近では、集会で使った名札（テープに名前を書いたもの）に興味を持ち、新しいものが欲しいことを「テープ ○○（本児の名前）書く」と伝えてくることがあった。教員がペンを見せながら「○○さん書く？」と手話と言葉で聞くと教員を指差し、教員に書いてほ

しいことを伝えてきたため、「一緒に書こう」と伝え、一緒に名前を書いた。名札ができると早速、自分の胸に貼り、とても嬉しそうに両手を挙げ喜ぶ姿が見られた。本児は相手に自分の思いを伝えたいという強い気持ちがあり、自分の言いたいことが手話で相手に伝わったときの嬉しさや喜びなどを表情や様子を見ていて、感じることができる。自分の思いが正しく伝わるやりとりの積み重ねが今後も相手に伝える自信につながっていくのではないかと考える。

・主観的気づき

○手話だけでは伝わらない時には、写真日記やiPadの動画・写真を使って何としても伝えるようになった。

・エビデンス

覚えた手話で伝えようとしているが、それを表すものを理解できないときにはiPadの写真や動画を見せて伝えてくるようになった。本児が相手に手話で伝えたが、相手は何を話しているか理解できないときには、写真日記からそのページを開いたり、iPadから写真・動画を探して見せたりしてくるようになった。さらに、「○○ 撮る」などと教員に伝えて、撮影したいものや人を自分で撮るようになってきている。例えば、買い物学習の事前ビデオを見た後で、自分が買い物する姿を撮りたいと「オレンジ iPad ○○（本児の名前）撮る」と手話で伝えてくることがあった。買い物後、嬉しそうに見返し、活動を振り返っていた。特に楽しい活動や本児が好きなものは撮影して残しておきたい姿が見られている。

担任や保護者が作成している写真日記は、教員が印刷した写真を本児が貼って写真日記を作ることに取り組んでいる。本児が楽しそうにやりとりしながら作成している様子から、今の段階としてはやりとりの中で写真日記を作成し、使っていくのがよいと考えている。また、本児がiPadで好きなものや気になったものを撮り、見返している姿から、自分1人でiPadを使って記録し、自分の意思を伝える補助的なものとして活用していくことを目指していけたらと考える。

・その他エピソード

友達の関わり

以前は、休み時間等に友達の肩をたたいて呼びかけたり、遊びに誘ったりする姿が見られたが、具体的な内容（どこに行く？誰と行く？何をする？）は教員が仲介する形で間接的なやりとりにとどまっていた。そこで、遊びに行く際に教員が「誰と一緒に？」



「どこに行きたいの？」とその都度聞き、「○○さんで行きたいのね。○○さんに話しておいで」などと伝え、友達の肩をたたき、手話で話す場面を意図的に設定した。現在では、教員が間に入らなくても一緒に遊びたい時に「遊ぼう」「○○行こう」などと友達も理解している手話でお互いに話す姿がある。

教員の意識

担任と本児が手話でやりとりしている様子や写真日記、サイン帳を回覧し、本児の実態を知ってもらえるように取り組んだ。現在では、授業の中で手話を使って指示を伝えたり、「一緒に行くよ」など簡単な手話を使って話しかけたりするようになってきている。



また、特に顔見知りの教員には自分から「おはよう」と手話であいさつをしたり、ハイタッチや手を振って積極的に関わったりする様子から、本児が手話をコミュニケーションツールにしていることが周りに伝わり、簡単な手話に関しては、担任の手話を真似して、手話で話しかける教員が増えてきている。

動画絵本

○使い方

・絵本の読み聞かせの場面で、登場人物の名前や話の内容などの情報を、指文字や手話の動画で知ることができるように動画絵本を使用した。

○児童の様子

・動画絵本を見ることで理解できる手話の数を増やすことができ、覚えた手話を日常生活で同じものを見つけたときに伝えてくることができるようになった。また、休み時間や家庭で見る姿もあり、余暇の1つとなっている。



あおむし



お腹ぺこぺこ

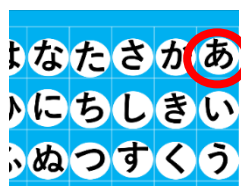
指文字あいうえおボード

○使い方

・文字への興味につながるように文字を押すと教員が表示する指文字の動画が出てくるものを個別課題学習や休み時間に使用した。

○児童の様子

・教員が押した文字の動画を見て、指文字の模倣をする様子が見られた。また、本児の名前を紙に書き、「同じの押してね」と手話と言葉で伝えると名前の文字を押して、動画の後に指文字をすることができた。



指文字あいうえおボード



指文字「あ」